

Newsletter for JADR

I . 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して

JADR 会長 大谷 啓一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
硬組織薬理学分野)

安孫子前会長を引き継いで、本年1月より会長に就任致しました。JADRは1953年に創立され、50有余年の歴史を誇る学会であり、その重みを考えると身の引き締まる思いが致します。私がIADRに入会したのは大学院生になって間もなくのことであり、当時は大西先生が会長を務められておりました。学術大会の準備、お手伝いをしながら初めて学術研究の奥深さを知ったのも本会でした。特に海外で行われるIADR大会に参加することにより、国際的な研究の潮流に触れることができ、そこから多くのことを学ばせていただきました。今では海外の学会に参加することはめずらしくありませんが、その当時はIADR大会ぐらいしかなく、そこに参加することはいつも名誉に感じるとともに、海外の空気を吸うよいチャンスでした。

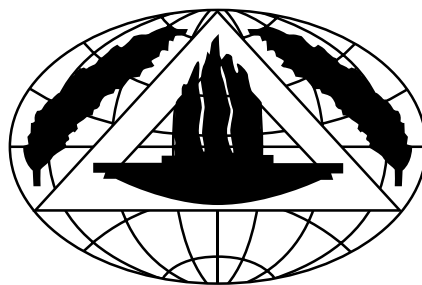
さて本年3月開催のポルチモアIADR大会では、JADRから選出された黒田敬之先生がIADR会長に就任されることになり、そのご活躍が期待されています。黒田先生は1997~1998年にJADR会長を務められ、さらにLOC委員長として幕張で行われた2001年IADR大会を成功に導かれました。また長年IADRボードメンバーとして深い見識を持ってIADR活動に尽力されてきました。JADRとしても黒田先生が十分に力を発揮されるようサポートしたいと思います。

JADRは2000名を超える会員を擁して、IADRの中ではアメリカについて2番目の会員数で構成されています。昨年はPAPF (Pan Asian Pacific Federation) の設立に参加し、オーストラリア・ニュージーランド部会、東南アジア部会、中国部会、韓国部会と連合を組んで横のつながりの強化を図っています。PAPFは安孫子前会長が現在 president を務めており、今後様々な活動を

行っていくことを企画されています。その中で2006年に開催されるIADR大会(オーストラリア・ブリスベン)では第一回のPAPF meetingが開催される予定ですので、皆様の御協力をいただければ幸いです。

PAPF設立のようにJADRは今後一層の国際性を求められることが様々な場面であることになると思われます。一例をあげますと、昨年のJADR大会より演題申し込みみにIADRのweb siteを使用することになり英語による情報が掲載されたことから、国外から演題が直接申込みれるということが起こりました。大会事務局もこのような申し込みがあることを想定しておらず少しあわてましたが、なんとか対応することができました。グローバル化が一層進む中、国際的な歯科医学研究を推進するJADRとしても受け身の立場としての対応から能動的な対応へ変わらざるを得ない時代となったと言えましょう。

これといった抱負を述べることはできませんが、JADR会長2年の任期の間に、より能動的な国際化の方策を考えてゆきたいと思えます。会員の皆様にはよろしく御支援の程お願い致します。



<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

II . 会長任期を終えて

JADR 前会長 安孫子宜光

(日本大学松戸歯学部生化学教室)

昨年暮れ 12 月 26 日に、インドネシアのスマトラ島沖でマグニチュード 8.9 の巨大地震が発生し、大規模な津波などによって周辺諸国で 15 万人以上の死亡者をだし、WHO から津波被災地の感染症の蔓延防止などの衛生対策に、最低でも 6000 万ドルが緊急に必要であると発表されております。ここに、哀悼の意を表し、犠牲者の冥福をお祈りいたします。1 月 3 日に IADR Executive Director の Dr. Christopher Fox からメールが届きましたのでここに紹介致します。

Dear Drs. Songpaisan, Abiko, Lo, and Kumar:

As you represent the IADR leadership in the Tsunami affected region as IADR Regional Board Member, PAP Federation President, South-East Asian Division President, and Indian Section President, respectively, please accept the IADR's deepest condolences regarding this global catastrophe and extend our thoughts to Members in your region. We hope you and your family, extended family, and the broad dental research communities have survived intact and are perhaps already assisting with the recovery operation.

We have posted some links to international relief organizations on our website (<<http://www.dentalresearch.org>), which seems almost insignificant compared to the scale of this disaster. Please let us know whatelse we can do. The international dental research community is small but generous in assisting our colleagues around the globe.

I would appreciate any updates from the region and will pass along to the full IADR

Board. Again, you are all in our thoughts.

Most sincerely,

Christopher Fox

Fox 先生には、来たる IADR 2005 Baltimore 大会への被災地 IADR member の参加に対して、できるだけの便宜を頂戴できるようにお願い致しました。

さて、奥田克爾前会長から JADR 会長を引き継ぎ、はや 2 年間の経ち、会長任期を終えることになりました。就任当初、余りの大役に重責を果せるか心配でございました。任期中、IADR/JADR 会費の IADR central office での徴収の執行、Pan Asia-Pacific Federation (PAPF) の設立、日本学会事務センターの破産などがあり、目紛しく時が過ぎたというのが実感であります。正直申し上げて、IADR 総会での Council meeting、各種委員会行事の出席、JADR の事務処理を何とかこなすのが精一杯で、これまでの会長先生から引き継がれてきた思い、とくに総合歯科学の国際学会 JADR のさらなる発展にどれだけ寄与できたか甚

だ不安に感じております。幸いにも、元 IADR 会長の作田守先生、次期 IADR 会長の黒田敬之先生、奥田克爾前会長のご指導のもと、そして大谷啓一次期会長、零石聡会計理事および理事各位、評議員の先生方の絶大なるご支援、ご協力を頂戴し、なんとか任期を終えることが出来たこと心より感謝申し上げます。

専門学会の学会運営上として、いかに多くの会員の参加のもと、歯科医学の先進研究の成果がもたらす情報の交換と活発なディスカッションの場を提供し、次世代の研究者を啓発できる学術総会を開催するのは、言うまでもなく重要な行事であります。小生の 2 年の任期中、零石大会長、大谷大会長のご尽力で、他の歯科関係の諸学会にも誇れるような立派な学術大会を開催して戴き、この機会に改めて両先生に深く感謝申し上げます。

会長として、いろいろ経験させて戴いて、今もっとも感じますことは、IADR Japanese division としての JADR の存在と国内における JADR に対する認識の余りに大きいギャップであります。IADR 総会の Council meeting、諸行事、委員会に出席いたしますと、紛れもなく JADR は日本の歯科研究界の代表であり、AADR とともに、歯学研究の国際社会のなかでリーダーシップをとらねばならない重い責任を感じます。国内的には、JADR は日本歯科医学会の専門分科会ですらないのが事実でありながら、一旦 IADR 総会で世界にでますと日本の代表としての重責を負わねばならない、という違和感があるのは否定できません。この違和感の解決は、短期的には困難ではありますが、JADR 設立の 50 周年を迎え、JADR が歯科医学関連学会を統括する国代表として国際的に活動できるよう、考えていかななくてはならないと感じます。

いよいよ、大谷啓一会長、小田豊次期会長の新体制のスタートになります、JADR 会員の皆様におかれましては、JADR が国際学会の一構成メンバーであることを再認識して、歯科医学研究を通じて健康科学に貢献できますよう、JADR 新体制へこれまで以上のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

全 JADR 会員の先生方、そして事務運営に協力戴いた諸氏に改めて心より感謝申し上げます。

Ⅲ．第52回JADR総会・学術大会報告

1. 第52回国際歯科研究学会日本部会（JADR）総会・学術大会の報告

大会長 大谷 啓一
（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
硬組織薬理学分野）

平成16年11月27日、28日の両日にわたって第52回JADR総会・学術大会が東京・神田一ツ橋にある学術総合センターにおいて開催された。海外よりのゲストとしてテキサス大学Prof. R. D'Souza、韓国KADRからの招待講演者延世大学のProf. Han-Sung Jung、さらにIADR会長Dr. P. Robertsonの参加をいただいた。大会は口演発表41題、ポスター発表54題、シンポジウム3題、特別講演2題、IADR会長講演という内容で行われた。一日目にはシンポジウム「内科的う蝕治療の確立に向けて」が行われ、モデレーターの田上順次教授（東京医科歯科大学）のユニークな発想のもと4人のパネリストにより最新のう蝕に関するトピックと内科的治療に関する講演をいただいた。続いて特別講演としてProf. R. D'Souzaにより“Molecular Insights into Tooth Agenesis and Supernumerary Dentition: From Bench to Clinic to Bench”のタイトルにて、歯、顎の発生とその病態における遺伝子のかかりについて詳細な解説が行われた。次にシンポジウム「世界をリードする我が国の骨代謝研究」として、モデレーター山口朗教授（東京医科歯科大学）のもと、4人の研究者によりホットな骨代謝の話題についてお話いただいた。特にこの分野における日本の貢献は素晴らしく、最新のハイレベルの話題を聞いたことは幸せであった。一日目の夕刻には隣接する如水会館において懇親会が行われ、IADR会長Dr. P. Robertson、日本歯科医学会会長 斉藤毅先生、東京医科歯科大学 江藤一洋歯学部部長をはじめ多数の先生方の参加をいただき、盛大に行われた。

二日目の午前にはIADR会長Dr. P. Robertsonにより“Challenges and Opportunities in Dental Research”という演題にて講演があり、前半ではIADRの活動と現在直面している課題、またそれについて解決へのチャレンジをお話いただき、後半ではWashington Dental Service Databaseを例にとり、臨床研究にとり一つひとつの歯の治療情報を蓄積し解析することが重要であり、それにより正確な治療指針を構築できることを強調された。午後には特別講演としてProf. Han-Sung Jungによる“Passions for Tooth Engineering”が行われ、最新の組織工学（tissue engineering）が歯の再生にどのように応用できるかビジョンを示され、非常に内容の濃い話題性に富んだ話は聴衆に感銘を与えた。続いてProf. Han-Sung Jungの話を引き継ぐ形で、シンポジウムとして「歯科領域における再生医療の最近の進歩」と

してモデレーター春日井昇平教授（東京医科歯科大学）、村上伸也教授（大阪大学）により、5人のパネリストが取り組んでいる様々な再生医療に関する情報を講演いただいた。口演発表、ポスター発表にも大変質の高い演題が目白押しで、あらためてJADRの研究レベルが高いことを認識できた。また今回、新しい試みとして大会両日にランチョンセミナーを開催することを企画した。一日目はジーシー後援によりダイレクトボンディングに関する話題、二日目はロッテ後援により再石灰化の話題を提供いただき好評であった。Hatton賞に関しては今回5名の受賞者によるポスター発表が行われたが、学会当日JADR理事メンバーの前で英語による5分の発表、5分の討論を初めて行うこととした。各受賞者は本番さながらに緊張して発表を行ったが、ボルチモアのIADR大会においても、この時の発表を忘れずに大いに健闘されることを期待したい。また今回の大会より新たに若手研究者の優秀演題に対する学術奨励賞の選考が行われて、別項にあるように5名の受賞者が選ばれ大会最後に表彰式が行われた。

今回の大会から演題登録システムにIADRのweb siteを初めて使用した。それは同時に全世界から演題申し込みが可能となったことを意味し、実際に外国からの発表申し込みが少なからずあった。このことは大会事務局を悩ませることともなったが、何とか無事に乗り切ることができた。今後本大会がより一層国際性を増すことを予感させる演題登録システムの変更となった。

本大会の参加者数は361人と従来の大会とほぼ同程度の人数であり、主催する立場からはもう少し参加者が増えたと議論が活発になるのではないかと印象があった。今回学術奨励賞の選考、Hatton賞受賞者による発表などが初めて行われたが、このような試みが定着すれば、学会もさらに盛況になると予想される。



IADR 会長 Dr. P. Robertson の講演



Hatton 賞受賞者（前田恵子・東医歯大）の発表

最後に安孫子会長ならびに理事会、評議員の先生方には、本会を主催するにあたり終始貴重な御助言と御指導をいただき心より感謝を申し上げます。また本大会の準備委員長の大役を担っていただいた高野吉郎教授には、今回初めてと名の付く事項が多い大会の中で、その準備の中心となり大変御苦労をおかけしたことを銘記したい。さらに大会運営に協力いただいた本学関係者の方々にも感謝したい。最後にJADR会員の先生方の御協力と御支援をいただき、大会を成功裡に終了することができ深謝申し上げます。

2. シンポジウム 「Toward Establishment of New Concept of Caries」

高橋 信博

（東北大学大学院歯学研究科口腔生化学分野）

う蝕が「修復」の時代から「予防」の時代に入って久しく、う蝕をう窩の発生前に捉え、進行を阻止し、再石灰化させるための具体的方策の必要性に迫られている。本シンポジウムでは、田上順次教授（東京医科歯科大学大学院）の卓越したモデレーターのもと、この問題を正面から捉え、その具体的方策として、う蝕リスク検査法（北迫勇一先生 東京医科歯科大学大学院）、再石灰化治療法（飯島洋一先生 長崎大学大学院）、食品コントロールによるう蝕予防法（今井 奨先生 国立保健医療科学院）、プラーク細菌コントロールによるう蝕予防法（花田信弘先生 国立保健医療科学院）に的を絞り、各シンポジストの講演と参加者を交えての総合討論が行われた。

『う蝕リスク検査法』では実例として「唾液緩衝能」が示され、ハンディー型 pH メーターを用いた唾液緩衝能測定器の使用によって、簡便、定量的で記述的かつ安価にう蝕リスクを評価する可能性が示された。また、*in situ* で歯表面 pH を測定できる小型 pH センサーを用いることで、個々の歯表面のう蝕活動性を評価しうることについても言及された。『再石灰化治療法』では、最初に初期う蝕病巣の特徴が説明され、初期う蝕は再石灰化可能であることが改めて明示された。次いで、再石灰化を進める要因と

なる「pH の回復」「Ca, P, F イオンの供給」を「長期間維持する」具体的方法が説明された。さらに初期う蝕の診断および再石灰化の評価法として、初期う蝕病巣の画像を標準化したグレイメージで解析する方法が示された。『食品コントロールによるう蝕予防法』では、Vipeholm study など食生活とう蝕発生の関係に関する研究報告を再認識することから始まった。次いで、近年使用頻度が高まっているう蝕予防用代用糖・代用甘味料について最新の文献をもとに検討し、さらに現在開発が進められている「特定保健用食品」などのう蝕予防食品の現状が説明された。しかしながら、食品の再石灰化機能を評価しうる標準化された方法がないなどの問題があることが指摘された。最後の『プラーク細菌コントロールによるう蝕予防法』では、具体例として「受動免疫」「う蝕ワクチン」「PMTc」「抗菌剤」「3DS」などについてその特徴と意義が説明された。しかし、いずれもミュートンスレンサ球菌などの除去を目的とした方法であり、予防を目的とする場合にはプラーク細菌の伝播と定着を阻止することが重要であることが述べられた。将来の方法として、効果的な「受動免疫」や「う蝕ワクチン」の可能性が示された。

その後の総合討論では、会場から様々な質問・意見が出され、初期う蝕とその再石灰化に対する関心の高さが伺えた。現状の不十分さを指摘した発言もあり、初期う蝕の病因論の構築、そして初期う蝕の治療法の確立が早急に必要であると感じられた。「内科的」という一見違和感を感じるキーワードが、改めてう蝕学において重要な意義を持つことがわかるシンポジウムであった。

3. シンポジウム 「Bone Research Frontier in Japan」 / Mineralized Tissues

伊藤 祥作

（大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座）

平成 16 年 11 月 27 日（土）と 28 日（日）に第 52 回国際歯科研究学会日本部会（JADR）総会・学術大会が東京都の学術総合センターにて開催された。骨研究における昨今の日本の研究業績が、海外のメジャージャーナルにおいてかなりの頻度で見かけることから日本の骨分野における研究は非常に高いレベルにあると思われる。本学会の1日目のシンポジウム「Bone Research Frontier in Japan」は、まさに題名通り、日本の骨研究を代表する一線の先生方の研究成果を聞くことができた。シンポジウムの前半は骨芽細胞の分化に関する研究で世界をリードされている先生方の研究成果を拝聴することができた。

小守壽文先生（長崎大学大学院発生分化機能再建学）は、今から 7 年前に骨無しマウス（骨芽細胞が無い）を Cell に発表され、Runx2 が骨芽細胞の初期分化を制御する重要な転写因子であることを世界に示され、その後も一貫して、Runx ファミリーの骨芽細胞の分化制御機構および機能制御機構について、ノックアウトマウスおよびトランスジェニックマウスを用いて Runx ファミリーの骨芽細胞の分化における働きを詳細に解析しておられるというお話を聞くことができた。

Runx2ノックアウトマウス以来、骨無しマウスの報告は絶えて久しかったが2年前にOsterixノックアウトマウスを中島和久先生(東京医科歯科大学大学院難治疾患研究所・分子薬理学)がCellに発表された。Osterixは、Runx2の下流ということであったが、やはり骨芽細胞が分化してこないのは、非常にインパクトがあった。昔、大阪大学で生化学の授業を受けたことをなつかしく思い出しながら拝聴したが、現在はOsterixの機能について更に掘り下げた研究を行っているというお話であった。

後半は、破骨細胞の分化における研究で世界をリードされている先生方のお話であった。

高柳広先生(東京医科歯科大学大学院分子細胞機能学)は、4年前にNatureに“oste-immunology”という概念を具現化した論文でそのストーリー展開といい非常に美しい論文を発表され、感動したのを覚えている。その後も、破骨細胞に関与するシグナル伝達経路について詳細に解析されNatureをはじめ海外の高名な雑誌にコンスタントに報告され、そのデータを交えたお話を聞くことができた。

最後に、西村理行先生(大阪大学大学院生化学)は、RANKの下流で活性化される転写因子群について興味を持たれ、研究しておられた。中でも、c-Junのドミナントネガティブ変異体を破骨細胞特異的に発現させたトランスジェニックマウスは、骨大理石病を発症しており、JNK/c-Junシグナルが破骨細胞分化に必須であることを明かに証明されていた。

4人の先生方は、これまでの研究成果をレビュー的に話され、研究の流れというものを知ることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。そして、少しでも先生方の研究の組み立て方や哲学というものを吸収できたらと思った。

Mineralized Tissues分野の発表は、口演が10題、ポスターが8題であった。大きく分けると、「骨芽細胞および破骨細胞の分化に関連する分泌タンパクや、細胞内シグナル伝達経路に関する研究」、「硬組織の発生、分化に重要であると考えられているタンパクの精製と、そのタンパクの持つ機能に関する研究」、「硬組織の発生過程での分泌タンパクや転写因子などの機能解析に関する研究」、「実験動物を用いた臨床的な研究」など、演題は基礎的なものから臨床的なものまで多種多様であった。今回のシンポジウムおよび研究発表を聴いて、硬組織に関する研究は、歯科系の研究者が大きな推進力を担っていることを改めて感じることができた。

4. シンポジウム 「Advances in Regeneration of Oral Tissues」

村上 伸也

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座
歯周病分子病態学・歯周病診断制御学)

21世紀の医学研究におけるキーワードに“再生医療”が挙げられる。そして、我が国の歯科医学の分野においても、「歯」・「歯槽骨」・「歯周組織」の再生を目指した基礎および臨床研究が

盛んに展開されている。今回のシンポジウムでは、春日井昇平教授(東京医科歯科大学)と私で座長を務めさせて頂き、「歯科領域における再生医療」研究の現状および、それを支える歯周組織の再生医学および発生学に関する最新の知見が5名のシンポジストから発表された。

まず、山田陽一先生(名古屋大学医学部附属病院遺伝子再生医療センター)は、「ティシューエンジニアリングコンセプトに基づいた歯槽骨と歯周組織の再生」と題して、骨髄由来細胞をPlatelet-rich plasma (PRP)と混和したものをinjectable tissue-engineered boneとして骨欠損部へ投与することにより、同部に歯槽骨あるいは歯周組織の再生が誘導される旨、発表がなされた。ヒトへの応用も始められており、今後のさらなる進展が期待される発表であった。

次に村上伸也(大阪大学大学院歯学研究科歯周病分子病態学)が「FGF-2による歯周組織再生誘導の分子基盤」と題し、サイトカイン療法として塩基性線維芽細胞増殖因子(FGF-2)を局所投与することにより、ビーグル犬およびカニクイザルの歯槽骨に人工的に作製した骨欠損部に、歯槽骨、歯根膜、セメント質の新生を伴った、歯周組織再生が誘導されることを発表した。また、最近終了した、ヒトの2および3壁性骨欠損におけるFGF-2による歯周組織再生誘導の安全性・有効性を検討した第II相臨床試験の概要が紹介され、ヒトへの応用に向けた取り組みが既に開始されていることが示された。

次に春日井昇平先生(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科インプラント・口腔再生医学)が「薬物を添加した骨補填剤：抜歯窩適用における有用性」と題して、ラットの下顎前歯部の抜歯窩に-TCPとsimvastatinの合剤を投与することにより、同部に有意な骨誘導がなされる旨、発表がなされた。simvastatinが、化学的に安定であること、リコンビナントタンパクに比し安価であること、局所投与での安全性が担保されていることが示され、安全性・有効性のみならずコストに対する研究者の意識も新規薬物療法を樹立する上で、重要なポイントとなるとの提言がなされた。

次に本田雅規先生(東京大学医科学研究所幹細胞組織工医学歯胚再生学)は「ティシューエンジニアリングによる歯の再生」と題して、ブタの歯胚由来細胞を回収し、collagenの足場材と混和したものを移植することにより、エナメル、歯髄、象牙質、セメント質の形成を伴った歯様の組織が構築される旨の発表がなされた。今後、リアルな歯の形態形成をティシューエンジニアリングの手法により如何に制御するかが、臨床応用に向けた重要な課題になるであろうとの提言がなされた。

最後に斉藤正寛先生(神奈川歯科大学歯科保存学講座顎機能先端歯学研究センター)が「セメント質マーカー分子に基づいたセメント質形成機構の解析」と題して、ウシ歯小囊細胞(BDFC)中に存在するセメント芽細胞前駆体の分離培養法に関する発表がなされ、同前駆体細胞を同定する上で斉藤先生が発見されたウシセメント質特異的マーカー3G9の有用性が示された。さらに、不死化BDFCよりセメント芽細胞前駆細胞(BDFC8)

が樹立され、同細胞の phenotypical analysis の結果が示された。

学術大会最終日の最終セッションであったにもかかわらず、多くの先生方の参加を得てシンポジウムを終えることができ、JADR会員の先生方の再生医療に対する関心の高さをうかがい知ることができた。また、我が国における歯科分野の再生医療の現状が明示されたのみならず、今後の方向性・問題点もフロアの先生方とのdiscussionで明確にされた非常に意義深いシンポジウムであった。JADRの特質を生かした、分野横断的なシンポジウムが今後も積極的に企画されるよう期待したい。

5. Microbiology / Immunology

片岡 宏介

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座
予防歯科学教室)

第52回JADR総会・学術大会第2日目に行われたMicrobiology / Immunology関連分野の発表は口演が13題、ポスターが5題で今回の総演題数95題の2割弱であった。口演においては、東京歯科大学の奥田克爾先生、大阪大学の恵比須繁之、栗石聰両先生の司会進行により、和気藹々とした雰囲気の中で、活発な質疑応答が行われた。また、ポスター発表では限られた討論時間を超過しているにもかかわらず熱心な討議が交わされる光景もみうけられた。発表内容としては、基礎、臨床研究はもちろんのこと、学生教育におけるOSCEを念頭においた試行報告なども発表されており、非常に多岐にわたるものであった。

今回特に印象に残ったいくつかの発表を紹介すると、臨床研究分野として、人工口腔装置を開発し、臨床分野で使用される様々なレジン複合体上の初期バイオフィルム形成の差異やフッ化ジアミン銀のう蝕抑制効果の報告が東京医科歯科大学からあったほか、院内感染対策に大きな影響を与えと考えられる歯科用ユニットの給水系バイオフィルム形成において、PVDF膜チューブが抑制効果を示すということを示すSEM解析により視覚的に結論づける報告が大阪大学のグループからあった。また、基礎研究分野として、*P. gingivalis* と *T. denticola* との共凝集活性は線毛ではなく、*P. gingivalis* 膜タンパク質の Arg-gingipain が重要であることを報告した東京歯科大学のグループや、*P. gingivalis* の赤血球凝集活性を有する40kD-OMPの機能構造解析について、またそれとは異なる赤血球凝集活性をもつ130kDタンパク質内の機能モチーフに対するリコンビナントIgY抗体を作製し、それが *in vitro* において赤血球凝集活性を抑制することが日本大学松戸歯学部グループにより報告された。また、感染症の病態をはじめ治療法の選択に感染細菌の定量的な分析は必要であることは知られているが、ここ数年SARSや腸管出血性大腸菌、サルモネラ菌などの検出に応用されており、これまでのPCR法の欠点を解決する画期的な遺伝子増幅法であるLAMP法を用いての *H. influenzae* の同定が日本大学のグループから報告されていた。これらのものは、感染症研究におけるBacteriologyの立場から報告されたものである。Immunologyの立場から

の研究報告としてはリコンビナント *P. gingivalis* 線毛による自然免疫系に与える影響をTLRの発現解析により行った長崎大学グループの研究や、歯周病菌によって産生された酪酸により刺激を受けたT細胞が、接着分子を発現することによりT細胞のアポトーシスを抑制するという明海大学・日本大学の共同グループの研究がみられた。また、これまで獲得免疫系を賦活化する粘膜アジュバントとして知られているコレラトキシンが抗原と共にマウスに経鼻投与することによりTLRの発現を誘導し、自然免疫系を活性化させ、鼻腔においてもB1細胞が誘導される可能性があることを大阪大学・米国アラバマ大学の共同グループが報告をした。これらの基礎研究と臨床研究が相互に近づき、具体的にどのように研究を展開していくかは、今後の課題であろう。

本大会では、当該分野でのシンポジウムが組まれていなかったことが少し物足りなかったように感じたが、Hatton Award Competitorsとして当分野から推挙された東北大学グループの研究内容は、炎症性サイトカインにより刺激された口腔上皮細胞がPR3を発現することを明らかにし、さらに抗PR3抗体を用いた研究手法によりPAR-2およびNF-κBの関与のもと、口腔上皮細胞がケモカインであるIL-8やMCP-1を産生することを報告したものであった。これは、組織特異的な炎症過程のメカニズムを究明するという、高インパクトファクターな研究内容であった。今後更なる当該分野における口腔粘膜免疫研究の進展が期待される。

6. Material Science

田上 直美

(長崎大学医学部・歯学部附属病院専門歯科)

第52回国際歯科研究学会日本部会(JADR)総会・学術大会は、雲一つない快晴の2日間に開催された。筆者のような遠方からの参加者にとって、この快晴は望外の贈り物であった。

Material Science関係の発表は、Material Scienceと題する口頭発表8題と、Dental Material カテゴリーのポスター発表4題、Adhesion / Tooth Whitening / Materialのポスター発表7題の計19題であり、分野としては前回より盛況であった。演題数が多い分内容も多岐にわたり、聴講する参加者にとっても、発表者にとっても、多くの情報を吸収できる大会であったと言える。

興味深かったことは、保存や補綴のような、日々診療に従事する講座からの発表が多かったことで、このことはDental Materials分野発表の多くが歯科臨床に密接に関連したものであることを伺わせた。事実、印象材や仮着材、セメント、スプリント、レーザー、漂白など、結論として臨床的な示唆を多く含む発表が多く、特に、中国からの演題を含む義歯関連の3演題は、基礎系発表の多いJADRにおいて臨床的な見解を材料学的に示す貴重なものであったと思う。日常的に用いる歯科材料に関する発表は、研究者のみならず臨床家にとっても有益で親近感を持つものであり、このことは今回のMaterial Science分野の特徴と

して特記すべき点ではないだろうか。

本学術大会では、この他に接着分野の発表が5題あり、最近の接着研究の充実ぶりが実感できた。接着分野の発表と言え、歯質とレジン接着が主であるような感があるが、接着技法は本来ありとあらゆる臨床的局面で用いられているものであり、本学会でも歯質とレジン、金属とレジン、レジンとレジンなど、多方向から吟味された発表を聴講することができた。接着は材料系研究の一分野であるが、今後も臨床的な発展が大いに期待できると感じた。

このような Material Science 分野の充実の背景には、DMGC-J 研究賞の存在があるように思う。DMGC-J 研究賞は、IADR 歯科材料グループ日本部会 (DMGC-J) が JADR 学術講演会における優れた研究発表に授与するもので、2004 年度 DMGC-J 研究賞は東京医科歯科大学 1 名、長崎大学 2 名に授与された。かく言う筆者も技工用光照射器の開発に関する研究で受賞することが出来た訳であるが、選考委員の方の鋭いご意見やご指摘は、受賞云々とは別に、今後の研究推進の参考となり指針となる有難いものであると深く感謝した次第であった。分野全体としてのこのような研鑽の積み重ねが、来年以降の更なる充実をもたらすのだと実感した。

7. Neuroscience

山城 隆

(岡山大学大学院医歯学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野)

第 52 回 JADR 総会・学術大会における Neuroscience 分野関係の発表は口演 4 題であった。1 題目は、東京歯科大学の歯科矯正学講座から、歯科矯正治療によって生じる痛みに対するレーザー照射による臨床的な鎮痛効果に関する報告であった。歯を移動させると痛みが生じることが知られているが、この研究では上顎結節部あるいは下顎孔部にレーザーを照射すると、矯正治療中の歯を打診することで生じる痛みが、有意に軽減することが示された。2 題目も矯正治療による痛みに関する報告が岡山大学大学院顎顔面口腔矯正学分野からなされた。1 題目とは異なり実験的歯の移動モデルを用いた研究で、歯の移動によって生じる上行性の侵害情報が下降性の抑制系で制御されている可能性について検討したものであった。三叉神経脊髄路における *preproenkephalin* mRNA の発現を検討したところ、歯の移動 24 時間後において角尾側亜角および吻側亜核の発現が有意に増加した。このことから、内因性麻薬鎮痛物質のひとつであるエンケファリンが歯の移動によって生じる痛みの制御に関与していることが示唆された。3 題目は、岡山大学大学院歯科保存修復学分野からラットの最後野領域における Dopamine 受容体の発現が D2 および D5 領域に認められることが報告された。4 題目は、朝日大学小児歯科学講座からの報告で、経口で食事を摂取することが海馬の働きに影響を及ぼす可能性について検討がなされた。この研究では老化促進マウス SAMP1 を用いてチューブのみで摂食させると、経口摂食コントロール群と比べ、位置情報に関

る学習能力が著しく低下することを示した。さらに、チューブ摂食群では、海馬 CA1 領域の Fos タンパクの発現が有意に減少し、CA1 pyramidal 細胞の樹上突起棘の密度が有意に減少することを明らかにした。このことは咬むことが加齢下においては海馬に影響を及ぼし、位置の記憶の維持に影響を及ぼすことが示唆された。全体としては、臨床を考慮した研究報告が多く興味深かったが、演題数が少ないことが残念であった。

8. 第 52 回 JADR 学術大会印象記

中塚美智子

(大阪歯科大学口腔解剖学講座)

第 52 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会が平成 16 年 11 月 27、28 日の両日、東京・学術総合センターにて開催された。大会では IADR 会長 Dr. Paul Robertson の口演のほか、Dr. Rena D'Souza, Dr. Han-Sung Jung 両氏の特別講演、シンポジウム、口演・ポスター発表、ランチョン・セミナーなどが行われ、非常にバラエティに富んだ内容となった。

今大会においても歯科の多岐にわたる領域から実に独創的かつ興味ある研究が数多く発表された。骨代謝、組織の再生といった世界でもトップクラスの研究をはじめ、既存ならびに新しく開発された歯科材料、薬品、器材などの特性や精度の検証、また顎顔面領域での加齢変化の追究など、非常に様々な角度からアプローチがなされていた。このことは本学会のクオリティーの高さを反映しているものと考えられよう。

中でも大会 2 日目に行われたシンポジウム「歯科領域における再生医療の最近の進歩」は、今後の歯科医療に光明をもたらすのではと予感させられる、大変すばらしい発表ばかりであった。すでに臨床応用がなされているものもあれば動物実験段階のものもあったが、かつては有り得ないと考えられていた組織の再生の手法が少しずつ確実なものとなり、実際に組織が形成され始めているという現実がすぐそばにあることを実感させられた。さらには今回生体外で歯胚から歯を形成させることまで成功したとの発表もあった。まだまだクリアしなければ



Prof. Han-Sung Jung の講演と Dr. P. Robertson の質問

らない段階は残されているものの、これらの研究発表によりこの分野の研究が一層勢いづくのではないかという感想を持った。

また大会初日のシンポジウム「内科的う蝕治療の確立に向けて」では、食品と除菌という2つの観点からう蝕予防について研究した内容が発表された。近年予防という概念がマスメディアでも大きく取り上げられ、国民の意識が非常に高くなってきている。だが実際臨床現場で患者の摂取する食事に対する適切な助言や、適切な口腔内清掃並びに除菌が十分に行われているとは言い難い。これらの原因の1つとして明確な基準やマニュアルが確立されていなかったことが挙げられよう。特に除菌に関してはう蝕の原因となる細菌に直接働きかける治療法であり、その効果が非常に期待されると思われる。本シンポジウムが契機となり、演者らの提言が具現化されることを望みたい。

今大会でもう1点印象に残ったのが、2日目の口演発表において発表された歯科専門家の生活習慣についての予備的研究であった。調査に協力した医療従事者が多くなかったことに驚いた。喫煙習慣が歯周病、あるいはインプラントに与える影響について論じられることが多くなっているにもかかわらず、当の歯科医療従事者の喫煙に対する意識がとても低いことに疑問を感じた。患者との信頼関係を築くことは近年ますます重要になってきている。これからの歯科医療のあり方を考える上で、歯科医師をはじめとした歯科医療従事者自身の生活習慣などに対する意識改革ならびに向上を企図したシンポジウムの開催も考慮すべきではないかと思われる。

歯科医療、歯科界のさらなる発展のために、今後JADRの果たす役割はますます大きくなるものと、今回参加して強く感じた。

9. 2004年度学術奨励賞受賞者決まる

第52回国際歯科研究学会日本部会（JADR）総会・学術大会において、若手研究者による優秀演題に学術奨励賞がおくられることになり、以下の5名の方が栄えある賞を受賞された。

1. 伊藤 祥作
（大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座）
「Gp130-SHP2-ERK シグナル伝達経路は骨芽細胞の分化を抑制的に制御する」
2. 庄子 幹郎
（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科発生分化機能再建学講座口腔病原微生物学分野）
「Porphyromonas gingivalis FimA 線毛に対する Toll like receptor の応答性について」
3. 伊藤 理恵子
（東京歯科大学微生物学講座）
「Arg-gingipainはPorphyromonas gingivalisの共凝集に関与する」
4. 泰江 章博
（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔顎顔面矯正学分野）
「頭蓋顎顔面発生過程における *Fgf10* 遺伝子発現調節領域の解析」
5. B.J. VARGHESE
（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科小児歯科学分野）
「乳歯および永久歯象牙質上における培養破骨細胞の骨吸収活性の比較」



52回国際歯科研究学会日本部会（JADR）総会・学術大会最終日（2004年11月28日）における学術奨励賞表彰式
左より、小田学術奨励賞選考委員長、伊藤理恵子、庄子幹郎、B.J. VARGHESE、伊藤祥作 各受賞者、
大谷大会長、高野準備委員長

IV .第23回 IADR 韓国部会 (KADR)
 学術大会参加報告

大谷 啓一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織薬理学分野)

第23回 KADR 学術大会は2004年12月10日に行われ、JADRからの招待講演者として大会に参加した。12月9日に羽田を立ち、ソウルまで空路2時間、2週間前に行われた JADR 学術大会に KADR から招いた Hang-Sun Jung 教授 (Yonsei 大学) の出迎えを受け、大学スタッフとともに車にて開催地の Iksan までドライブとなった。その日の夜は KADR 役員、韓国歯系大学の教授と交歓を行い大学の実情などについて情報交換を行った。Iksan (益山)市は韓国中部の全羅北道にある地方都市であり、ソウルから高速道路にて南に3時間ほどかかり、日本の県庁所在地という雰囲気のある町であった。Iksan 市には Wonkwang 大学歯学部がある関係でこの地において開催されたとのことである。KADR 学術大会はこれまでほとんどソウルにて行われており、地方で行うのは初めてであると KADR 会長 Syng-III Lee 教授 (Yonsei 大学 Oral Biology 講座) が教えてくれた。翌日の学術大会は Wonkwang 大学の記念講堂で朝9時から行われた。口演会場とポスター会場があり、演題数はポスターが約40、特別講演2、シンポジウム2、昼のランチョンセミナーにて構成されて、参加者は約200~300人程度であった。私は特別講演1として "The Therapeutic Targets in Osteoclasts-Inhibitory Actions of Drugs that Reduce Bone Resorption" として1時間の講演を行った。日程の関係で講演終了後すぐにソウルに帰り帰国せざるを得ないのは残念であったが、韓国中部の風光明媚な土地をドライブできたのは幸いであった。今後さらに韓国 KADR と JADR の交流が盛んになり相互理解が深まることを期待したい。



KADR 学術大会にて

V .理事会、評議員会および総会報告

JADR 幹事 柴田 恭子

(日本大学松戸歯学部生化学講座)

本年度は、理事会4回(2月9日,5月17日,8月9日,11月26日)、評議員会および総会(11月27日)が1回ずつ開催されました。

1)2004年度会計決算は、亀山 洋一郎監事並びに大浦 清監事による監査承認後、2005年度予算と共に第4回理事会承認を経て、評議員会および総会において承認されました。

2)2005年度事業計画

以下の2005年度事業計画が提案され承認されました。

総会・評議会：第53回学術大会開催時

理事会：4回開催(内1回は、第53回 JADR 総会・学術大会開催時)

学術大会：第53回 JADR 総会・学術大会開催は、山本照子教授(岡山大学)を大会長として、2005年11月26日・27日の会期で岡山大学創立五十周年記念館において開催される予定。学術奨励賞を授与。

Newsletter：2回発行(2月および9月発行予定)

会計監査：11月中旬

KADR 学術大会へ特別講演者を派遣

2005年度 IADR 評議会へ4名を派遣

2005年度 PAPF 運営委員会へ3名を派遣

2006年度 Hatton Award 候補者5名を選考

JADR Annual Report を IADR 本部へ報告

3)次期役員および評議員について

役員選出規定に従い JADR 次期役員(案)が上程され、第4回理事会の議を経て、評議員会で承認されました。また、役員選出規定に従い JADR 新評議員の選出が行なわれ、理事会の議を経て、会長がこれを委嘱いたしました。任期は、いずれも2005年1月1日から2006年12月31日までです。

4)日本学会事務センター破綻に関する報告および新事務局設置について

財団法人日本学会事務センター破綻に関して、事件の経過と JADR 事務局の対応および、破産債権届出書記載事項について報告を行いました。また、JADR の新事務局として、理事会の議を経て、(株)コネットに委託したことを報告しました。

5)名誉会員および終身会員推挙

黒田 敬之名誉教授が名誉会員に推挙され承認されました。

総会において、ブランク進呈が行われました。

また、会則に従って、以下の先生が終身会員として、理事会より推挙され、評議員会および総会において承認されました。

(ABC順、敬称略)

花田 晃治、伊藤 学而、高江洲 義矩

6) 前大会長へブランク贈呈

前大会長の栗石 聡教授へ感謝のブランクが贈呈されました。

VI. 新役員名簿および新評議員名簿

役員名簿 (2005-2006)

(敬称略)

会 長	大谷 啓一	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織薬理学分野
副 会 長	小田 豊	東京歯科大学歯科理工学講座
前 会 長	安孫子宜光	日本大学松戸歯学部生化学教室
会計理事	村上 伸也	大阪大学大学院歯学研究科分子病態口腔科学専攻口腔分子免疫制御学講座
理 事	高野 吉郎	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野
理 事	山本 照子	岡山大学大学院医歯学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野
理 事	根本 君也	日本大学松戸歯学部歯科理工学講座
理 事	高橋 信博	東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野
理 事	今井 奨	国立保健医療科学院口腔保健部口腔保健技術室
理 事	飯田順一郎	北海道大学歯学部歯科矯正学講座
理 事	大東 道治	大阪歯科大学小児歯科学講座
理 事	田上 順次	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔制御学分野
理 事	前田 伸子	鶴見大学歯学部細菌学講座
監 事	奥田 克爾	東京歯科大学微生物学講座
監 事	栗石 聡	大阪大学大学院歯学研究科先端口腔疾患予防学分野
幹 事	青木 和広	東京医科歯科大学医歯学総合大学院硬組織薬理学分野

評議員名簿 (2005年~2006年)

(敬称略)

北海道医療大学歯学部口腔外科学第一講座	柴田 考典
北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座	亙理 文夫
岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座	加藤 裕久
東北大学大学院歯学研究科顎口腔形態創建学分野	笹野 泰之
奥羽大学歯学部口腔機能分子生物学講座	堀内 登
明海大学歯学部小児歯科学講座	渡部 茂
日本大学松戸歯学部小児歯科学講座	前田 隆秀
東京医科歯科大学大学院節食機能保存学分野	三浦 宏之
東京歯科大学臨床検査学研究室	井上 孝
日本歯科大学歯学部薬理学教室	筒井 健機
日本大学歯学部歯学科補綴学教室第三講座	松村 英雄
昭和大学歯科病院高齢者歯科学教室	佐藤 裕二
神奈川歯科大学口腔外科学第二講座	久保田英朗
鶴見大学歯学部小児歯科学講座	朝田 芳信
新潟大学大学院医学総合研究科摂食環境制御学講座	前田 健康
日本歯科大学新潟歯学部歯科保存学教室第二講座	加藤 喜郎
松本歯科大学歯科矯正学教室	上松 節子
朝日大学歯学部総合歯科学講座機能修復学講座	山本 宏治
愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座	中垣 晴男
大阪歯科大学生理学教室	西川 泰央

大阪大学大学院歯学研究科顎顔面矯正学教室	高田 健治
岡山大学大学院医歯学総合研究科顎口腔機能制御学分野	窪木 拓男
広島大学歯学部第二歯科補綴学教室	濱田 泰三
徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部口腔顎顔面矯正学分野	森山 啓司
九州歯科大学口腔病理学講座	福山 宏
九州大学歯学研究科口腔保健推進学講座口腔感染免疫学分野	花澤 重正
福岡歯科大学小児歯科学講座	本川 渉
長崎大学大学院医歯学総合研究科節食機能回復診断治療学分野	熱田 充
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科歯周病態制御学分野	和泉 雄一
慈恵医科大学慈恵医科大学歯科口腔外科学	杉崎 正志

VII. 第53回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会のご案内

大会長 山本 照子

(岡山大学大学院医歯学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野)

会 期: 2005年11月26日(土曜日), 11月27日(日曜日)

会 場: 岡山大学創立五十周年記念館

(<http://www.okayama-u.ac.jp/50kinenkan/kinenkan-index.htm>)

懇親会: 11月26日(土)リーセントカルチャーホテル

(<http://www.aigroup.co.jp/culture/>)

大会事務局: 岡山大学大学院医歯学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野

〒700-8525 岡山市鹿田町2-5-1

TEL: 086-235-6692, Fax: 086-235-6694

(E-mail: jadr53@md.okayama-u.ac.jp)

内 容: 特別講演, シンポジウム, ランチョンシンポジウム, 市民公開シンポジウム, 一般口演, ポスターセッション, 展示, その他

VIII. 第83回IADR 総会(Baltimore)のレポーター募集

ご存知のとおり2005年3月9日~12日, Baltimoreで第83回IADR総会が開催されます。つきましては, JADR会員の先生方からIADR総会の様子など9月発行予定のJADR Newsletter第2号にご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。レポーターをお引受けいただける先生は3月31日(木)までに事務局(E-mail: jadr@conet-cap.jp, Fax: 06-4806-5658)までご報告下さい。多数お待ちしております。

IX . Hatton Award 応募候補者
(2006 年度 IADR , Brisbane ,
Australia) の募集

2006 年度の Hatton Award 応募候補者を募集します。

応募ご希望の方は5月以降にHPに掲載します応募要領をご覧の上ご応募下さい。

本賞は第 10 代 IADR 会長 Edward Hatton 博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior 部門、Senior- Basic Science 部門、Senior- Clinical Research 部門です。各 Division から推薦を受けた候補者は第 84 回 IADR 総会での Hatton Award 本選にて審査を受け、上位 2 名が順位付けで受賞者に選ばれます。

X . JADR 事務局移転のご案内

このたび JADR 事務局が、下記新住所に移転しました。今後の各種問合せ等は新住所までお願いいたします。

〒 532-0011 大阪市淀川区西中島 5-5-15
新大阪セントラルタワー 8F
(株)コネット アカデミックプラザ内
TEL : 06-4806-5656 FAX : 06-4806-5658
E-mail : jadr@conet-cap.jp



83rd General Session & Exhibition of the IADR
34th Annual Meeting of the AADR
29th Annual Meeting of the CADR

CONTENTS

I . 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して	1	I .Greeting of the New JADR President	1
II . 会長任期を終えて	2	II .Experience as President of JADR	2
III . 第52回 JADR 総会・学術大会報告	3	III .The 52nd Academic Meeting and Annual Business Meeting	3
1 .第52回 国際歯科研究学会日本部会 (JADR)		1 .Summary of the 52nd Academic Meeting of JADR	3
総会・学術大会の報告	3	Dr. Keiichi Ohya: The Chairman of the 52nd Academic Meeting of JADR	
2 .シンポジウム 「Toward Establishment of New Concept of Caries」	4	2 .Symposium -Toward Establishment of New Concept of Caries	4
Dr. Nobuhiro Takahashi: Tohoku Univ.			
3 .シンポジウム 「Bone Research Frontier in Japan」 / Mineralized Tissues	4	3 .Symposium -Bone Research Frontier in Japan / Mineralized Tissues	4
Dr. Shousaku Itoh: Osaka Univ.			
4 .シンポジウム 「Advances in Regeneration of Oral Tissues」	5	4 .Symposium -Advances in Regeneration of Oral Tissues	5
Dr. Shinya Murakami: Osaka Univ.			
5 .Microbiology/Immunology	6	5 .Microbiology / Immunology	6
Dr. Kosuke Kataoka: Osaka Univ.			
6 .Material Science	6	6 .Material Science	6
Dr. Naomi Tanoue: Nagasaki Univ.			
7 .Neuroscience	7	7 .Neuroscience	7
Dr. Takashi Yamashiro: Okayama Univ.			
8 .第52回 JADR 学術大会印象記	7	8 .Memory of the 52nd Academic Meeting and Annual Business Meeting	7
9 .2004年度学術奨励賞受賞者決まる	8	9 .Prize Winners of 2004 Young Investigator Award of JADR	8
Dr. Michiko Nakatsuka: Osaka Dental College			
IV . 第23回 IADR 韓国部会 (KADR) 学術大会参加報告	9	IV .A Report of the 23rd KADR Academic Meeting	9
Dr. Keiichi Ohya: Tokyo Med. Dent. Univ.			
V . 理事会, 評議員会および総会報告	9	V .Reports of the Board Meeting, the Annual Business Meeting and the Councilors Meeting	9
Dr. Yasuko Shibata: Deputy Executive Director			
VI . 新役員名簿および新評議員名簿	10	VI .New JADR Officers and Councilors	10
VII . 第53回 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会開催のご案内	10	VII .Announcement of the 53rd Academic Meeting of JADR	10
Dr. Teruko Yamamoto: The Chairman of the 53rd Academic Meeting of JADR			
VIII . 第83回 IADR 総会 (Baltimore) のレポーター募集	10	VIII .Call for Reports of the 83rd IADR General Session in Baltimore	10
IX . Hatton Award 応募候補者 (2006年度 IADR, Brisbane, Australia) の募集	11	IX .Call for the Hatton Awards Competitors of the 84th IADR General Session in Brisbane (2006) from JADR	11
X . JADR 事務局移転のご案内	11	X .Announcement for Change of JADR Secretariat's Address	11

編集後記

今回よりニュースレターの編集を担当することになりました。JADRは2千名を超える学会組織でありながら、IADRの日本部会としての位置づけもあり雑誌は発行しておりませんので、会員へ直接送付される学会情報はニュースレターのみとなります。従って、掲載内容についての会員の皆様からの積極的なご提案を頂きながら、有益な情報と充実した内容のニュースレターにしたいと考えております。年2回の発行を予定しておりますが、ご協力をお願いいたします。

今回は、役員の交代と52回大会の報告が中心になっております。52回大会の各レポーターの記載された記事を読んでいただくと、現在の歯科医学の研究動向が見えてくるようです。報告原稿を書いて戴いた各先生方に改めて深謝する次第です。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

連絡先: 〒532-0011 大阪市淀川区西中島5-5-15 新大阪セントラルタワー 8F

(株)コネット アカデミックプラザ内 FAX: 06-4806-5658 担当: 木村雄一郎

JADR 副会長 小田 豊 (東京歯科大学歯科理工学講座)

連絡先: 〒261-8502 千葉県美浜区真砂1-2-2 FAX: 043-270-3780 E-mail: yoda@tdc.ac.jp

2005年2月28日 発行